

第 23 回 「愛と死と孝と（一）」

宗教と祖先祭祀と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 23 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「愛と死と孝と」第一回をお話しします。

これまでずっと『論語』の話をしてきましたが、『論語』と言えば、ほとんどの方は、それは道徳的内容と理解していらっしゃると思います。

しかし、前回の「孔子像」では、宗教家としての孔子像があるとお話しました。今回はそこに関わってくる話です。

儒教には、道徳的な面のほかに、もうひとつ大きな面があります。それは宗教的な面です。

これを説明するにあたり、私はどのような宗教でも当てはめることができる概念を作りました。

宗教とは、「死」並びに「死後の世界」の説明者である。

こういう立場で、私は宗教を見えています。

世界に存在する宗教で有名なものといえば、一神教ではイスラム教、ユダヤ教などもありますが、代表的なものとして、キリスト教を挙げましょう。それからインド仏教。これはインドの諸宗教の代表として挙げます。そして、もうひとつが儒教です。

宗教名	精神	肉体	死後の世界
キリスト教	○	×	天国か地獄か
インド仏教	○	×	輪廻転生
儒教（日本仏教）	○	○	招魂（復魄）、再生

儒教に（日本仏教）とあります。実は日本仏教の考え方や行いは、8割方が儒教なのです。

そこで、儒教に入れました。

逆に言えば、日本仏教とインド仏教との関わりは少ない。そう言い切っていいと思います。

【三つの宗教、それぞれの死後の世界】

まず、死後の世界。キリスト教の場合は、天国か地獄。神を信じる者は天国、信じない者は地獄。

インド仏教の場合は、輪廻転生という考え方です。これは、亡くなると、次に生まれる世界は、

六つのコースに分かれていて、どこに進むかは、この世に生きている時の所業の良し悪しで決まります。死ぬと、次の生へ。次から次へとぐるぐると輪廻転生していきます。この輪廻転生の輪から脱する者が時々います。解脱です。悟りを得た人は輪廻転生から別の世界、仏の世界へと移っていきます。それ以外の人、永遠に輪廻転生します。ですから、時には人間が蛇になったり、あるいは餓鬼になったり、地獄へ落ちたりしていく、そういうことです。

儒教はどうか。人間の精神を支配しているのが「魂」、肉体を支配しているのが「魄」。
精神を指導する「魂」と肉体を指導する「魄」が混ざり合っているのが生きている状態です。
亡くなると、これが分裂します。

分裂して、「魂」は天に、「魄」は地下へ。

分かれただけなので、呼び戻すことができると考えたのです。

匂いの良い煙を上げて「魂」を呼び戻し、匂いの良い酒を撒いて散じて「魄」を呼び戻します。

「魂魄」は決められた場所、この世に帰ってくることができます。こういったことを考えたのが儒教です。

今日では、霊を慰める「慰霊」という形で残っています。日本仏教では、それを非常に大切にしており、先祖をお祀りします。日本仏教においては非常に重要ですが、この先祖を祀ることは、儒教そのものなのです。

このように、キリスト教、インド仏教、儒教では死後の世界が違います。それを信じ、それぞれがそれぞれの宗教を信じている。こういうことです。

【精神と肉体】

精神や肉体についてお話しします。

キリスト教は精神を認めます。なぜなら、神を信じるというのは、精神の働きです。

身体の方はどうか。もともと神がそのあたりの塵、芥、泥で作ったものが人間の身体ですから、

死ねば意味がない。なくなります。ただ神に召され、天国に昇るとき、魂だけが昇っていくわけにはいきませんので、魂が昇るまでのために、肉体を置いていくという意味でのお墓があります。それは日本人のようにお参りに行くお墓ではありません。上に召され、天国に上がる乗り物と
 いうといいでしょう。ですから、精神は認めますが、肉体に価値はありません。

インド仏教は、輪廻転生していくわけですから、身体に意味はありません。次の生の身体になるので、死んだ身体は焼いて捨てるだけです。インドにはお墓はありません。キリスト教は天に召される時、身体に乗っていくので、お墓は一応ありますが、お参りはしません。ただ、インド
 仏教ではお釈迦様への思いが深かったために、お釈迦様のお骨だけは残しました。

さて、儒教は精神を認め、肉体も認めます。「魂」は天に、「魄」は地下へ行きます。分裂はしますが、呼び戻すことができる。実は、「呼び戻す」、これが祖先を祀るということです。

【祖先祭祀】（血縁共同体の核心）（霊）

祖先祭祀が、儒教の中心となって、人々が納得していった。中国で始まり、朝鮮半島、ベトナム、日本と、東北アジアにおいて、これはごく普通のことです。

祖先を祀るためには、血のつながった者が集まって団結する。これが「血縁共同体」です。

この「血縁共同体」の核心、中心になっているものが祖先を祀ることです。

しかも儒教では、次のように言います。

「身は父母の遺体なり」（『礼記』祭義篇）

身体は父母の遺体、遺体とは残した身体。遺言とは、残したことばです。遺体は父母の残した身体という意味です。父母は祖父母が残した身体、祖父母の身体は曾祖父母の残した身体、という
 ことです。

今生きている人間は、元をたどれば、千年前にもどこかに先祖はいた。千年どころではなく、一万年前も先祖はそれぞれ生きていた。そして今に続いている。「生命の連続」です。

儒教は、これを一番大事なものとしてきました。

【生命の連続】(孝)

儒教の「生命の連続」が元になって、祖先を祀ることが第一となり、それだけでなく、一族が増えていく、血縁者が増えていくことが大事となっていきました。

血縁が増えていくことは、「生命の連続」と関わっていく。そのような宗教心を述べたのが、儒教です。祖先を祀ることを、儒教の柱としました。

儒教では、祖先を祀ることも親孝行の「孝」です。

現実の親に対する敬意も「孝」。一族が増えていく、これも「孝」です。

「孝」と言いますと、現実の親子間だけのことと思う方もいらっしゃるでしょうが、儒教はそうとは言っていません。それは「孝」のせいぜい三分の一のこと、残りの三分の一は祖先を祀ること、後の三分の一は一族が増えていくこと。

そして自分に子がなければ、姪や甥を愛しなさいということです。

このような儒教の宗教性が、東北アジアの人々の心をつかみました。

それが抜けないので、仏教が入ってきても、仏教の中に、儒教の「祖先を祀る」ことが入っていきました。

ですから、日本の仏教というのは、儒教の「祖先を祀る」お墓参りをする。(お墓は「魄」を管理しておく場所です)

また、一年ごとの慰霊祭など、これらを取り入れたのは、日本人が、もともとは儒教的な感覚を持っていたからでしょう。

日本仏教は大きく変形して、儒教を取り入れて成り立ち、今日に至っています。またもちろん

神道も生きています。神道や儒教を取り入れていき、お彼岸やお盆などの風習となりました。

「愛と死と孝と」。これまで「死」と「孝」を述べてきました。

では、「愛」は。前にお話ししましたように、「愛する」対象は、まず自分の親です。そこから始まって、いろいろな人に愛を及ぼしていく。

最高の愛は、親への愛です。死に対する悲しみも親への悲しみが最大です。

このように愛と死とを、「生命の連続」の中に位置づけています。

儒教は道徳的なことばかり、現実的な話ばかりと思ってはいけません。

儒教には、祖先を祀ることを中心とした「生命の連続」「孝」を重んじる宗教性がある。これをご理解いただきたい。

今回は「愛と死と孝と」の第一回をお話ししました。